辻邦生と音楽を語る 講座開催

学習院大

指揮者・矢崎彦太郎氏講演、朗読劇も

▶辻邦生

◀講演する指揮者の矢崎彦太郎氏 ©Concerto

『背教者ユリアヌス』（毎日芸術賞）や『西行花伝』（谷崎潤一郎賞）などの濃密かつ精緻な作品で知られる小説家、辻邦生（1925～99年）の魅力に迫る学習院大史料館講座「辻邦生――音楽・ことば・物語」が30日、長く仏文学を教えた東京・目白の同大、学習院創立百周年記念会館正堂で開かれる。コロナ禍のため、同史料館では近年、関連動画をオンライン配信してきたが、3年ぶりに講演会と朗読劇を一般公開する。

第1部「音楽の部」（午後1時半～）では、辻と同じくパリと東京に拠点を置き、辻文学に感銘を受けた指揮者で、辻邦生生誕百年記念事業組織委員を務める矢崎彦太郎氏が講演する。雑誌連載の短編小説集『楽興の時 十二章』（音楽之友社、90年）を刊行するなど、辻は音楽にも造詣が深かった。作品の根底に流れる音律の調べや、文学と音楽の接点を、矢崎氏が音楽家の視点から語る。

第2部「ことばの部」（午後3時～）では、〈声でつむぐ辻文学〉の7回目として朗読劇を上演。NPO法人「ことばのひろば 五億の鈴の音」（札幌市）の協力により、6人の大学生がイタリア・ルネサンスの中心地フィレンツェ（フィオレンツァ）の盛衰を克明に描いた歴史長編『春の戴冠』（77年）に挑む。

今回は全4巻（中公文庫版）に及ぶ記念碑的大作の朗読の前編。メディチ家統治による繁栄の下、永遠の美を追い求める画家サンドロ・ボッティチェルリの思いやフィレンツェの街を、語り手の親友フェデリゴをはじめとする登場人物の声によって再現する。正堂前では『春の戴冠』のミニ展示も行われる。

定員300人。往復はがきによる事前申し込みが必要（18日消印有効）。問い合わせは学習院大史料館（03・5992・1173）へ。

（辻邦生生誕百年記念事業組織委員・井上卓弥）